www.ficec.jp

外国人と日本人とが、　ともに豊かに生きる地域社会を!

ハローフレンズ

ファイセック FICEC 発行
ふじみの国際交流センター
Fujimino International Cultural Exchange Center

2007年 10月号 （隔月刊） 第93号

国際こどもクラブ通信

外国籍児童 ・ 生徒への日本語、 教科指導
毎週土曜日午前に開催。 ボランティア募集中

もっと日本語を勉強して、女優になりたい

中学１年生
吉川慧美

私は、今年の２月に日本に来ました。そのときは日本語が全然わかりませんでした。３月からセンターに日本語を勉強しに来ました。初めてセンターに来たときから先生は、ずっとやさしいです。センターの先生は一生懸命教えてくれて、すごくたのしいし、感激しています。

私は中学１年生です。４月から入学しました。学校では美術部に入ってみんなと一緒に絵を描いたり、一緒に話したりするのがすごくたのしい。学校で給食のときに周りの友達に中国語を教えるのがすごくおもしろいです。ウォシファンニーとみんな言えるようになりました。

日本は中国より宿題が少ないです。日本語は助詞がたくさんあるので難しいです。学校で歴史と理科の日本語がとくに難しいので、わかるようになりたいです。数学と英語は簡単です。もっと日本語を勉強して将来は女優になりたいです。

笑顔で、自信をもって

ボランティアスタッフ
白砂 香

「国際子どもクラブ」の一員として慧美さんについたのは、だいぶ日本語の基礎が終わって初級から中級に入るころだったと思います。

慧美さんは分からないことがあるとちゃんと質問をしてくれるのですが、説明が上手く伝わらず他のボランティアスタッフに言ってもらったりした時、改めて自分のボランティアとしての情けなさを感じたりしました。それでも慧美さんが誰よりも頑張っている姿を見て、自分も少しでも慧美さんが日常生活や学校生活に慣れていけるように頑張らなくてはと思い、今日まで日本語を一緒に勉強してきました。

慧美さんが「国際子どもクラブ」に初めて来た時は、緊張しているのか固い表情でしたが、最近では私だけではなく、他のボランティアスタッフの人達とも笑顔で話せるぐらい成長していると思います。日常会話や学校のこと、特技は何かなどの会話が、活発に交わされています。こうして、日本語を覚えてきた慧美さんが、将来どういう道に進むにしても、自信をもって笑顔で乗り越えていってもらいたいと思います。

ふじみの国際わいわいクラブ

参加する子どもたち自身が だんだんとジュニアリーダーとして成長

子どもたちとともに 自分も成長できる場所

国際わいわいクラブスタッフ
平岡　のぞみ　（19歳）

2005年、高校生2年生から国際わいわいクラブに参加。その後、高校を卒業して、現在は美容の専門学校に通っているのですが、今度はスタッフとして参加させていただいています。普段、専門学校に通っていることで忙しいのですが、月に一度の“わいわいクラブ”がとても楽しくて、私にとっては気分転換にもなるような、すごく貴重で楽しい時間となっています。

毎年８月に行われるキャンプは、子ども達が最も楽しみにしているイベントの一つで、いつもの“わいわいクラブ”だけでは見ることのできない子ども達の満面の笑みを見ることができます。また、私は今年で３回目の参加ですが、昨年に比べて、子どもたちがすこしお兄さんお姉さんらしく成長したのがよくわかるイベントだと思います。

また、わいわいクラブは子ども達の成長と共に、自分も成長できる場だと思っています。子ども達やスタッフに色々なことを教えてもらい、とてもいい勉強になっています。これからもできるだけ長く参加し、もっともっとみんなと一緒に自分も大人になっていきたいと思っています。

夜空に見た 数え切れないほどの星

国際わいわいクラブジュニアリーダー
新井　綾　（15歳）

国際わいわいクラブにジュニアリーダーとして参加しています。クラブに参加するようになったきっかけは、小学校２年生の時に、母が商店に張ってあったポスターを見かけて、申し込みをしたことです。弟がまだ生まれてすぐだったので、休みの日に、遊びに連れて行ってあげられないからというのが理由だったようです。小学生のとき参加者としてお世話になり、そのままジュニアリーダーとなりました。今でもジュニアリーダーとして活動しています。

今年の８月にあった長野県須坂青年の家でのキャンプの夜に、私はたくさんの星を見ました。それは真っ暗な空に数え切れないほどの星で、とても綺麗でした。普段は学校の勉強や時間に追われる毎日で、星なんかゆっくり見る時間もなかったけど、長野で見た星は小さいものから大きいものまで、とにかくたくさんありました。私はびっくりするのと同時に、こんなに美しい自然のものが、すでに都会では見ることが出来なくなっていることをとても残念に思いました。そして、改めて自然と人間との関係について、考える時間を持つことができました。

参加する子どもたち自身がジュニアリーダーとして活躍

国際わいわいクラブスタッフ
羽石貴裕

平日の朝、私達は家を出るとたくさんの子ども達を学校や幼稚園、保育園、そして通勤途中のバス停や駅などで様々な形で目にします。

皆さんは、近所のちょっとした顔見知りの子どもと挨拶を交わしているでしょうか？ほとんどの人はしないのではないでしょうか。挨拶の励行は近年の話題ではなく、昔から礼儀作法の１つとしてあり、日常の人と人とのコミュニケーションの第一歩となってきました。よく目にするのが、子どもたちが「こんにちは！」と発しているのに、大人は会釈だけだったり小さな声で応えたり、時には聞こえているのに見向きもせずといった光景です。行政や年輩の人たちで組織する青少年団体の多くは、こんな些細なコミュニケーションといったことから始まるのではなく、組織運営や慣例的活動を重きにおき、自分達の居場所作りをせっせと行っています。

当センターのふじみの国際わいわいクラブに関わりはじめて5年ほどになり、最初のころに小学生だった子ども達は既に中学生や高校生となり、ジュニアリーダーとして素晴らしい成長と新しい感性を私達に与えてくれています。彼らは、自分たちが小さかった頃を思い出し、その時優しく接してくれた高学年や大学生のスタッフのように、いつの間にか「お兄さん、お姉さん」へと育ちつつあります。

わいわいクラブのスタッフは高校生・大学生・社会人・主婦など様々な人達が短い期間や長い期間と多様に関わっています。子どもが成長すれば、スタッフもその分だけの年を取り、大学生たちは社会人となるなど、その年によってスタッフの数が大きく変動しているのも事実です。しかし、国際わいわいクラブでの巣立ちの過程を確立し、参加してくれる子ども達の多くがジュニアリーダーとして育ってくれるような場所となって、わいわいクラブを通して学校以外の友達や仲間が増え、そして成長し子ども達自身の想いや悩みを開放できる身近な居場所で活躍してくれればいいなと思います。

「社会と出会う」 教育プログラムとして、埼玉大学の学生たちがFICECでインターンシップ研修

埼玉大学には、理系、文系あわせて５つの学部があるが、全学部対象の講座の一つとして、一昨年から行われているのが「社会と出会う」というテーマ教育プログラム。実社会で行われているさまざまな事柄を早い段階で学ぶことで、数年後には社会人となる学生たちが「社会人としての基礎体力を身につける」というのがそのねらい。この教育プログラムには「仕事」「会社」など10のテーマが用意されているが、「NPO」というのもその一つとなっている。そして、その「NPO」というテーマを選択している学生が、毎年夏休みにはふじみの国際交流センター（FICEC）に「インターンシップ」として来所して、それぞれ１０日間の研修を行っている。

今年は、7人の学生がFICECの活動に加わったが、彼らが活動に参加して何を体験し何を感じたのかについて、そのうち３人の学生と担当教員の藤林泰さんに加わってもらい、座談会を行った。

●座談会出席者

桜田 裕香　（経済学部経営学科、18歳）
宮澤 万利江　（教養学部、19歳）
顧 然　（グ・ラン、中国大連出身）
（工学部機能材料工学科、19歳）
藤林 泰　（埼玉大学教員）
内藤 忍　（ハローフレンズ編集担当）

なぜFICECを選んだか

藤林　私は「社会と出会う」の講座の中では、「NPOと出会う」という授業を担当しています。NPOと出会うためには、実際にNPO活動を現場で体験するのがいちばん重要と考え、夏休みに10日間の実習を課しています。4月から7月はじめくらいまでは、基本的なNPOについての勉強と、受け入れのNPOとして11団体にお願いしていますが、その方々にゲストで来てもらって、どういう活動をしているかを紹介してもらうということをやってきました。

宮澤　2年生になったら国際関係論を専攻しようと考えていて、FICECが「日本に住んでいる外国人の支援をしている」と聞いて、どういうふうに支援しているのか知りたくて実習先に選びました。

桜田　外国の人たちでもフィリピンとか中国の人とは、私たちがふだんあまり出会わないので、そういう世界の人と触れ合えるのではないかと思って、ここにしました。

グラン　ぼく自身中国籍なんですけど、こうした外国人支援の団体が、どういう役割を果たしているのかが知りたくて選びました。中国語ができることも、役に立つかもしれないと思いましたし。

FICECではどんな活動をした？

内藤　FICECではどんな仕事をしましたか。

桜田　いちばん多かったのは日本語指導ですね。夏休みということもあって、フィリピンから来た小学生が勉強しに来ていました。あと、イベントでセンターの活動内容のパネル展示をするので、撮りおきの写真をパネルに貼っていくという作業。その写真がすごく楽しそうだったので、いろんな活動を活発にやっているということがわかりました。

宮澤　センターでやった仕事は、日本語を教えるというのがいちばん多くて、あとは今年度の分の生活相談のデータ見せてもらったりしました。それで気になったのが、DV（家庭内暴力）の被害で、これまではテレビとか新聞で見ても遠い世界のことのような感覚でしたが、実際に起きているんだと実感しまし

た。

グラン　日本語指導以外には、2005年度の生活相談の内容と処理についてまとめた資料を見て、どういう相談が多くて、原因は何なのか、それを減らすためにはどうしたらいいのか、解決方法を考えたりという仕事をやりました。

日本語指導の感想

内藤　日本語は、実際に指導してみてどうでしたか。

宮澤　英語がわかる人だったら、英語を交えながら教えるんですけど、本当に日本語しかコミュニケーションできるものがない場合もあって、そういうときはちゃんと伝わっているのかどうかも不安でした。

桜田　はじめて日本語を教えた子が、フィリピンから来てまだ1ヶ月ちょっとで、なかなかコミュニケーションがとれませんでした。フィリピンの子たちは、自分の母語に漢字がないから、教えるのもすごく難しかったですね。

グラン 子どもたちばかりでなく、大人の人も日本語教室に来ていました。英語ができる国の人の場合には英語を交えたりしてコミュニケーションしながら教えました。

宮澤　とくに子どもたちの場合、勉強する意欲がある場合はすごく教えやすいんですが、そうでない場合には、どのようにしたら興味をもってくれるようになるか、ぜんぜんわかりませんでした。

活動についての感想

内藤　センターでこういう支援活動をしていることについて、どう思いましたか。

桜田　生活相談のときに、横にいてその話を聞いていたことがありました。準備なしにいきなり日本に来て困っているというような、本人の責任もかなりあるようなケースもあったんですね。それでも、センターの人たちはちゃんと話を聞いて、見放さないで力になってあげようという姿勢が印象に残りました。

宮澤　スタッフ会議のときに、「やりがいとか、やっていて良かったと思えることはありますか」って聞いたら、「やりがいとかそういうことよりも、いま困っている人がいて、放っておけないから」という人がいて、親兄弟や友達でもなくて、ぜんぜん赤の他人なのに何とかしてあげたいというのが、いまの私にはできないので、すごいなと思いました。

桜田　それでいて、何かを犠牲にしてやっているというのではなくて、「人が笑ってくれたら自分がうれしい」という感じなんですよね。

活動についての意見

内藤　活動に参加して、いろいろ見聞した目で、「ここは、もうちょっとこうしたらどうか」というようなことがあったら話してください。

グラン　ここに来てわかったのは、結婚して日本に来たような人の場合には、周りに母語が話せたりして相談できるような人がいないんですね。そういう環境の中で、このセンターがすごく役立っていると思うんですが、もっと外国人同士がつながりをもって、お互いに協力するようにすれば、もっと生活がスムーズにいくのではないかと思いました。

宮澤　日本語を教えたときに、相手の人がいまどれくらいの進み具合なのかが、ぜんぜんわからなかったんですね。だから、受講者が、どこまで勉強していて、今日はどういうことからやればいいのか、そういう情報があればいいと思いました。

内藤　自動車教習所で個々の教習生に作られる受講簿みたいなものがあればいいということですかね。

宮澤　そうですね、そういう進捗状況がわかるようなものがあれば、すごく教えやすいと思います。

桜田　生活相談のときなんかに、やはり言葉の壁があって、お互いに話をどこまで理解しているかわからいような気がしました。非常に難しいとは思うんですが、とくにタガログ語とか中国語とかを話せて通訳できる人がいると、すごくスムーズに話が進むと思いました。

藤林　いま日本では「格差社会」ということが言われていますが、日本で外国人が暮らしにくいということは、一つの格差社会だと思います。そう考えると、外国人の問題は、日本の子どもや高齢者の問題と同様に社会の仕組みの中でいろんな人が暮らしにくくなっていることの表れではないかと思うんですね。そんなことも、この10日間のインターンシップで感じてくれると、この授業の意味が生きてくると思います。

内藤　本日は、ありがとうございました。

内閣府、 埼玉県の主催、 共催による ＤＶ被害者支援ボランティア講座を開催

外国籍市民のための生活相談業務を行っているふじみの国際交流センターでは、相談内容として「日本人の夫からの暴力を受けた」といったDV（家庭内暴力）にかかわる問題が多いことから、これまでにもさまざまな形でDV被害者支援のためのボランティア講座を開催している。

8月5日には、その一環として、内閣府、埼玉県などの主催、共催による「DV被害者支援ボランティア講座」が、センター事務所内で開かれた。

当日は、NPO法人「埼玉カウンセリングセンター」代表理事の高倉恵子さんが講師となって、「配偶者からの暴力被害者支援の基本的心構え」をテーマにした講座が行われ、センターで生活相談などに加わっているスタッフら13人が参加した。

DV被害者支援ボランティア講座を聴講して

お茶の水女子大学文教育学部人間社会科学科教育科学コース 岩根　ちひろ

今回の講座で、DV被害者のカウンセリングをされている方のお話を初めて聞くことができ、その難しさや責任の重さ、重要性を強く感じました。

最も印象に残っていることは、助けを求めてきた人を保護するだけでなく、どのように自立を援助するかが重要となるということです。傷ついているクライエントを保護することはもちろん大切なことですが、その段階が終われば、自分で自分のことを決定する力をつけさせ自立を促すことがより重要であり、より難しいことだと感じました。自立を促すことに関して、カウンセラーがなすべきことは、「こうすべきだ」「ああすべきだ」と意見を押しつけることではなく、様々な選択肢を挙げ、クライエントが自分で決定するように援助することだそうです。困っている被害者を目の前にすると、自分の見解を前面に押し出して解決を急ぎたくなりそうですが、あくまで本人自身の自己決定を促し、尊重することが自立の援助となるということに気づかされました。その人自身が自立するところまで援助をしてこそ、真に被害者の助けとなれるのだと思います。

また、この講座で二次的被害ということばを初めて知りました。二次的被害とは、DVから逃れるために相談に行ったにもかかわらず、その対応において被害者がさらに傷つけられてしまう、ということです。高倉先生が特におっしゃっていたことは、「別れなさい」「働きなさい」しか言わず、それができない被害者がDVを助長しているのだという対応のしかたが、さらに被害者を傷つけるということです。被害者を責めるような発言をしてはいけないのは当然ですが、被害者の話を充分聞かずに「別れなさい」「働きなさい」というアドバイスしかできなければ、被害者の自己決定の機会を奪うことになります。クライエントの気持ちをよく理解しないままに無責任に対応してしまう怖さを痛感しました。

この講座で高倉先生のお話を聞くことができ、多くのDV被害者を救うためにも、適切な対応で被害者の自立に責任を持てるカウンセラーが強く求められているということを改めて感じました。

自分のペースを守って、楽しく長く続ける

高橋恭子

私がセンターのボランティアを始めて、今年で6年。その間、日本語、国際理解、情報誌制作、生活相談、シェルターなど、多くの事業に参加し、素晴らしい経験をさせていただきました。

私は子育てと仕事をしながらのボランティアなので、センターとの関わりには波があり、ほぼ毎日通っていた時期もあれば月に1～2回の時もありました。今考えると、自分に無理のないペースを探りながら、その時その時の自分にできること、やりたいことを選んで活動してきたのが、ここまで続けてこられたコツだったように思います。

実際、センターの活動に長く携わっているスタッフの方を見回してみると、皆さんそれぞれに自分のペースを保って主体的に活動されているように見えます。

私は昨年「子どもと共に育つ親の会」を立ち上げ、外国籍親子と日本人親子の交流イベントを毎月開催するようになりました。たくさんのスタッフの方に協力してもらっていますが、今はまだ慣れないせいか準備で大変なときもあります。早く自分が楽しめるペースを見つけて、長く楽しく続けていきたいと思っています。

支え合っていることを自覚することから

小原知子

生活相談でいろいろな人たちに出会った。

生活相談を始めて5年ほどたったころのことである。どしゃぶりの中をたずねって来た女性とじっくり話す機会があった。言葉が足らなくて誤解を受けたとき、母語で言い返せないもどかしさ、誤解が解けない悲しさ、悔しさを語ってくれた。「あなたたちが私の話を聞こうとしてくれたから、話すことができた。ありがとう」と言ってくれた。そのとき、はじめて外国で暮らす人たちのもどかしさ、悔しさ、悲しさに触れたような気がした。

保険がなくて、ぎりぎりまで手術を伸ばしてきた女性が手術しないと失明すると医師から宣告された。あっちこっち金策にまわったが、前例がないということで借りることができなかった。落ち込んだ私たちを「心配しないで、神様のミラクルがあるから」と彼女は励ましてくれた。彼女の強さに圧倒され、はずかしくなったことがある。彼女は、手術を受け、今幸せに暮らしている。

外国籍の人たちの相談にのるようになって、約10年なろうとしている。相談者は、ほとんどが女性である。生活相談は彼女たちが、自分で問題を解決できるように、寄り添い支援することである。

心も体も傷つき考えられない人もいる。彼女がどうしたいのか、どうすることがいいのか、問題を解決していくために話をじっくり聞くことから始まる。話すことによって、本人もわたしたちも何が問題なのかが見えてくる。その問題を本人が解決していこうとすることを大切にしている。そして私たちはその中でいろいろなことに気づかされ、教えられている。時には落ち込むこともある。そんな時相談者に励まされ、支えられることも少なくない。

生活相談は、相談をする側も、受ける側も人として互いに助け合い、支えあいながら問題を解決することであると思っている。それを相談者も私たちも自覚することが、互いの自立につながっていくと感じている。

センターの活動をご支援ください
会員・賛助会員・寄付のご案内

●活動を担う会員……正会員
正会員は、スタッフなどとして活動を担っていただく会員です。この会員は、総会などでの議決権をもちます。
年会費：個人1口 3,000円、団体1口 10,000円

●センターを財政的に支える会員……賛助会員
賛助会員は、センターを財政的に支えていただく会員です。総会等での議決権はありませんが、センターのイベントなどのご案内や、機関誌をお送りいたします。
年会費：個人1口 3,000円、団体1口 10,000円

会員、賛助会員にはこの機関紙をお送りします

郵便振替口座：00110-0-369511
口座名：ふじみの国際交流センター

ご寄付をいただいた方々
ご支援ありがとうございます

● 2006年4月～（50音順・敬称略）
穴沢エミリン　伊藤智明　伊藤真弓　いも煮会　上島直美　小澤ヴィクトリア　小原富明　オムテック(株)　葛西敦子　加藤久美子　金子忠弘　上福岡教会　候　国際ソロプチミスト　後藤泰弘　駒形一夫　菅山修二　鈴木譲二　堰代仁子　染谷英子　高橋郁子　高橋智子　武田和子　寺村壁如　中嶋恵津子　萩原千代子　長谷川美紀子　ハナロウ会　羽石電気　半田栄子　東入間防犯協会　三澤真理　村上省三　百瀬　滉　森田信子　矢野やすこ

●ご寄付は税金の控除や損金参入の対象となります
ふじみの国際交流センターは、国税庁からの認定を受けた「認定NPO法人」ですので、ご寄付は、法人であれば損金参入が認められ、個人であれば寄付控除の対象となります。

ふじみの国際交流センター（FICEC）のスクール、クラブ

日本語教室
「生活に役立つ日本語の習得」を目標に、日本人が日本語で教える教室。
●毎週木曜日
午前10時～12時
受講料：無料

国際こどもクラブ
日本語が不自由なこどもたちに日本語や勉強を教えます。
●毎週土曜日
午前10時～12時
受講料：無料

パソコン教室
外国人、日本人にパソコンの技術指導をします。
●月2回土曜日開催
午前10時～12時
受講料：日本人1000円
外国人300円

国際スポーツクラブ
上福岡の中学校体育館でバスケットボールを楽しみます。
●毎週日曜日
午後7時～9時半
参加費：大人100円

中国語教室
学習者の中国語能力により、初級、中級上級に分かれて学習します。
●毎週金曜日
午前10時～12時
受講料：1回200～300円

韓国語教室
韓国語初級講座。韓国人の先生が、やさしく丁寧に教えてくれます。
●毎週月曜日
午前10時～12時
受講料：1回500円

ポルトガル語教室
ブラジルで通訳の仕事をしていた方が指導。
●毎週火曜日
午前10時～12時
場所：西公民館
受講料：1回1000円

英語教室
初心者を対象としたスクールです。グループで楽しみながら勉強します。
●毎週水曜日
午後7時～
受講料：月4回4000円

編集後記
あなたも編集委員会に加わってください。大歓迎です。

■体育1だった私は、いままで一度も車の免許を取ることを考えたことがありませんでした。しかし、両親が高齢になってきたこともあり、教習所に通い始めました。これが、意外に楽しい！不安100％だっただけに、驚いています。といってもまだ、教習車に乗ったのは1回だけなので、今後もこの気持ちを維持できたらなと思っています。（上原）

■今月は、編集担当が多少、多忙だったために、発行が少し遅れてしまいました。発行が遅れると、配布が二度手間になってしまうので、スタッフの皆さんに迷惑をかけてしまいます。できるだけ遅れないようにしたいと思います。（内藤）

■「読みやすくて楽しい情報誌ですね」「写真が多くてわかり易いですね」ハローフレンズを読んだ方々から、うれしい感想が寄せられています。もしもコンクールがあれば、ホームページに続いてこちらも優秀賞が貰えるのではないかと、自負しています。センターに関わった初期の人からベテランまで、大勢の意見が掲載されているのが特徴です。センターの活動をより多くの人に理解していただけるように、これからもいろいろ工夫していきます。知りたい情報や載せてほしい記事がありましたら是非知らせて下さい。（石井）

特定非営利活動法人ふじみの国際交流センター
〒356-0004 埼玉県ふじみ野市上福岡5-4-25
Tel：049-256-4290　Fax：049-256-4291
生活相談専用電話：049-269-6450

編集スタッフ
発行者：石井ナナエ（センター理事長）
編集委員（50音順）：阿澄康子、荒田光男、岩田仁、石原怜実、上島直美、上原美樹、王祺、王賛博、川田明香、黄耀潤、斉藤恵子、篠島幹昌、内藤忍、長谷川正江、山崎友理